



席上

垣根草

一

~ 13
3105
1



へ13
3105
1-5
門へ13
3105
巻1

席上奇觀垣根草巻首

近頃故篋乃中に垣根草と題せり

そのかろとを獲てそのまを披覽す

其文鄙俚に諸家の草紙の

かろりか體にわだ假名にまゝい

え江乃ららあく觀るんまゝい

少も其載ふれも皆古者志

遺事幽冥人物靈異の誌誠

昭和九年
八月三日
購求

席上乃奇觀（一）と云々（二）作者乃
 姓名と志（三）以（四）思（五）く（六）奇（七）と（八）云（九）心
 閑人（一〇）の（一一）後（一二）と（一三）云（一四）茶（一五）話（一六）の（一七）代（一八）の（一九）
 不（二〇）ト（二一）云（二二）と（二三）云（二四）人（二五）遅（二六）日（二七）長（二八）夜（二九）乃
 後（三〇）然（三一）と（三二）云（三三）友（三四）と（三五）云（三六）は（三七）作者（三八）の
 卒（三九）意（四〇）を（四一）云（四二）洛（四三）西（四四）隱（四五）士（四六）某（四七）誌（四八）に
 此（四九）草（五〇）紙（五一）雖（五二）非（五三）世（五四）教（五五）補（五六）史（五七）傳（五八）之（五九）書（六〇）
 讀（六一）之（六二）供（六三）一（六四）時（六五）之（六六）奇（六七）觀（六八）則（六九）可（七〇）謂（七一）作
 者（七二）

者之卒意也仍授剞劂云爾
 明和七年寅正月菅翁某誌

因（一）之（二）云（三）云（四）此（五）書（六）原（七）卒（八）一（九）帙（一〇）十（一一）卷（一二）
 侍（一三）之（一四）今（一五）之（一六）前（一七）伊（一八）と（一九）持（二〇）り
 ち（二一）り（二二）云（二三）云（二四）後（二五）篇（二六）五（二七）卷（二八）之（二九）古（三〇）今（三一）
 武（三二）將（三三）外（三四）傳（三五）と（三六）題（三七）云（三八）云（三九）凡（四〇）古（四一）今（四二）
 武（四三）將（四四）の（四五）事（四六）蹟（四七）紀（四八）傳（四九）云（五〇）云（五一）後

たふとあつたたるはくはく系
逸史といふ書あり待行
他日とまじの

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 加藤草卷之一 and 〇二）

席上奇観垣根草物同録

一の巻

深草の翁相字の御地女と知る事

伊豆第乃中於重衛の娘と冥婚の事

極能正速荒田乃祠と壞事

二の巻

在原業平文海に託し久寛と新事

寛明義徳と結し石山に隠る事

三の巻

靱暗宗文姉再生の縁と結事

宇野太郎隆寺の怪に結事

四の巻

小櫻奇縁にしる貴子と壽年
山村が子孫九世同族忍の字と守る年
夏庵鐵砲の妙遂の道と守る年

五の巻

松村兵庫吉井の奴従と守る年
千載の班狐一原を圖と試むる年
環人見美澄と激の家と真と守る年

以山十之條

堀根集卷之一

席上奇觀壇根草一之巻

深草の翁相字の柳地奴と守る年

元弘の頂山城深草の里士二人の隠まり常に於て守る年

せぐらえ相字の柳と守る年一後と其母の權及守る年

かどきんその柳文字の点画と守る年吉田禍福と守る年

差と守る年其人姓名と守る年深草の公羽との守る年

弘建武の乱に畿内最争乱の境と成四民その土と守る年

あつ公羽と守る年一遊と守る年一麻雁の頭と守る年

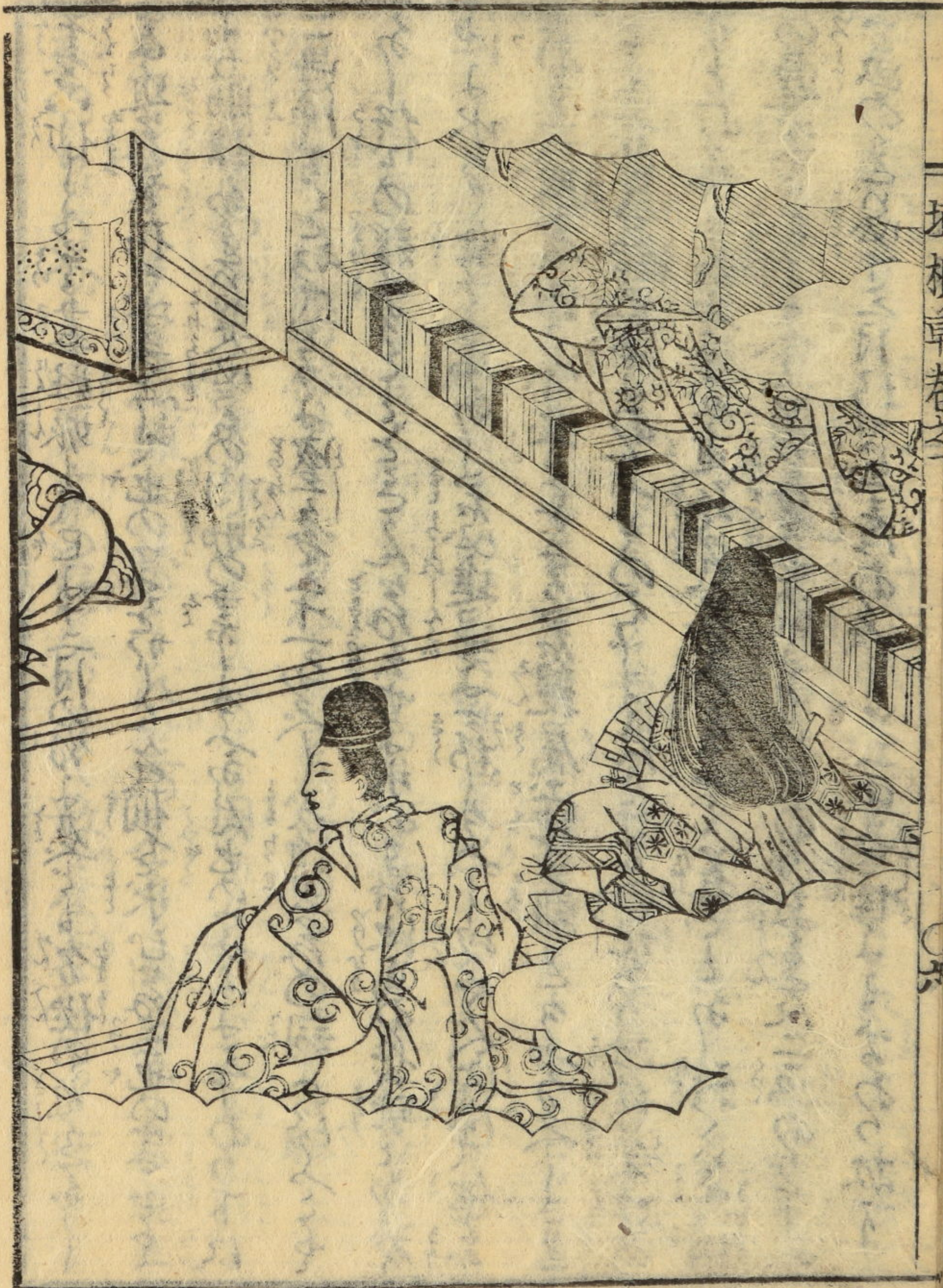
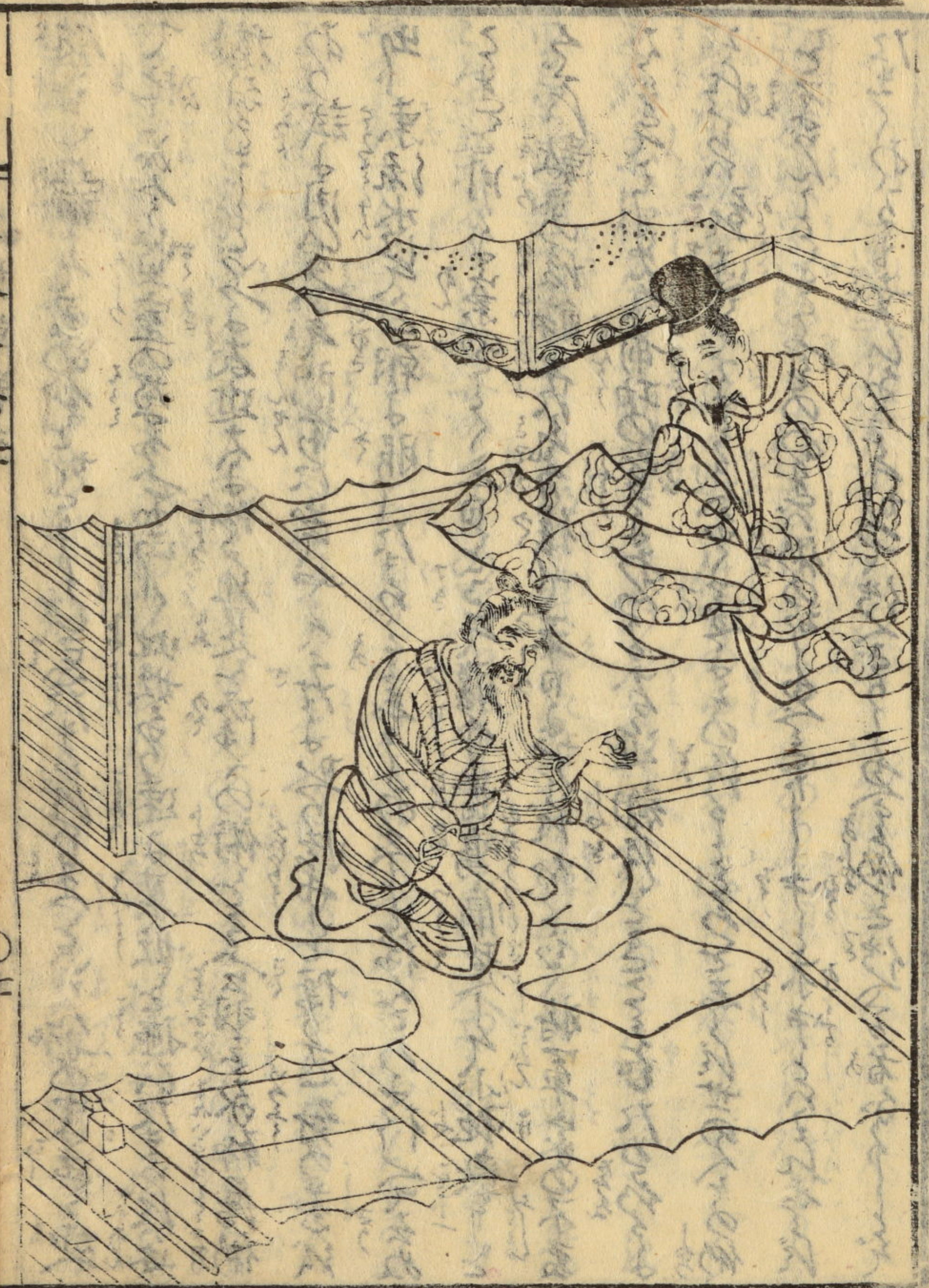
もすり静おんと守る年又守る年と守る年

柳の妙あると守る年相と守る年者多し上皇其名と守る年

朝の字と守る北面と守る年相と守る年

其妻より才出多し遂に執事師也及子繁さきより名が詞がも
 なることあり後子執事高師直義と不平に確執するに及ぶと
 其の字を以て吉志と云ふに見えし眉を頓穿て之を禍平と出
 たりは折して四の字とあり其後よりまたはとてやうと
 かく言ふは二府の人執事の怒をば身えりて死すなり
 祐清死すは即ち一人何のなきことわんと独言に去ぬ馬に牛
 八日と経て族滅の禍よりより人々其言の神のごとくなり
 松浦に馬を近しつるを左京たりしが國を脱れ大津南に
 子方し奉りけり松浦に族のそとに在る方と國たり友近在
 系のうらむども將軍家の疑ひかりて數多の忠をもちてばり

善くゆも妻妊娠し己未二月の節に及ぶも分岐のれを
 友近を名と名妻をい也の字をかくん相と水むも也の字を
 より助語ありて是必君内助の書りたる也の字より午あり下
 二画添ふを以てしりは盛多を午ありて友近を名の詞たりとせ
 り佐佐の詳ありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 池は水なり馳り馬あり君必進退しは名なり一は池や人を添へ他
 土あり地あり今人と土ととてとてとてとてとてとてとてとて
 とも也の字諸の事ありとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 ことわくしとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 の遅速とありとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 二画のまひ必し二月にして知春のまひ一は二の奇怪よりあり故り



二
坊
草
卷
之
一

能事と論どしよめかたさしし思たはるは是といりん也の字出と加
 て地ふ今賢室のなるふ山く地故あり速し其故と拂いたまはる安
 撫ありしとつる友近人よはる是を降くの術と云ふ羽云ふ柳蔭術
 あり試し用ひるを門前に先やえなまかり情中と推りて一羽の意紙
 出東流水はく之朝子服一なるを多しあ平と伝ごうは行くて去ぬ
 こせと用ひる案のこく之目と云ふ鴈中雷鳴痛楚しく小地敷平と
 なる敷の境跡をたぬか後て平日やせはるを將軍家の不意
 んまえんし先前功の當りあつる友近謝儀と云ふをむためめり
 とはるの跡迹と云ふる人あく遠くその終ると云ふは世の人との術
 と云ふんしと云ふものおまの術のあつるしと云ふしと云ふは
 はしくわらも幸いあらんかや傳ごうし魚を術と傳ごる者ありしと云

伊友若力けりて伊友の姫と真婚の事

弘長河原の海をさし伊友行来してそのありし世の行来あり
 来水の後世を定作し逃くは世のありし世の行来ありし世の行来あり
 それが末に伊友若力則伊友と云ふありし世の行来ありし世の行来あり
 男あり或時不用の事ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来あり
 こりて其末に伊友の若力ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来あり
 やがて伊友若力ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来あり
 この世の行来ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来あり
 わりて其末に伊友の若力ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来あり
 こりて其末に伊友の若力ありし世の行来ありし世の行来ありし世の行来あり
 伊友の編戸もさしはるいふ方終るこりて其末に伊友の若力ありし世の行来あり

今も此の世に生かす人ありては内に入ればわが世に
 ともなひなるより人の徳をそとえ在のけしむはつとあはれ
 けく尾花のうらむ花を流らりゆく紅雲のうらむ花を流らりゆく
 一とてなすわが世にわが世にわが世にわが世にわが世にわが世に
 今も此の世に生かす人ありては内に入ればわが世に
 ともなひなるより人の徳をそとえ在のけしむはつとあはれ
 けく尾花のうらむ花を流らりゆく紅雲のうらむ花を流らりゆく
 一とてなすわが世にわが世にわが世にわが世にわが世にわが世に

今も此の世に生かす人ありては内に入ればわが世に
 ともなひなるより人の徳をそとえ在のけしむはつとあはれ
 けく尾花のうらむ花を流らりゆく紅雲のうらむ花を流らりゆく
 一とてなすわが世にわが世にわが世にわが世にわが世にわが世に
 今も此の世に生かす人ありては内に入ればわが世に
 ともなひなるより人の徳をそとえ在のけしむはつとあはれ
 けく尾花のうらむ花を流らりゆく紅雲のうらむ花を流らりゆく
 一とてなすわが世にわが世にわが世にわが世にわが世にわが世に

くらびの終の夜は濃くて まるごのさきまのうらにのまんとすうから
 らいふかゝるまの夜のあかりがけし月影の残は市川月をくら
 んどくまの夜の天の河原の御女をばあしうらゆりやを女に侍
 たりありきうきく物のかずも身もあはれたの下級ゆくふまに侍
 うらまゝのさきまのうらにのまんとすうからまをくまをくまを
 酒肴とあがりかりは婚儀と侍やと市川もさうに数ふとくばけはら
 くらりてかゝるまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 けりてくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 後明くまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 にとくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 しきだんまの祥のまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを

かゝるまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 くまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 うらまゝのさきまのうらにのまんとすうからまをくまをくまをくまを
 き主上門院とくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 坊の方のまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 還すの時をくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 はいこのまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 つらよのまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 たる西國のまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 て主上親のまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを
 におをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまを

に詠草とさうし

さらば後のをたれ後のまはるるのなまらにづま
あしきもどはる後をのむに後をのむにのむに
若く視しをえ

あゆむるのまを人知しきりしはのしりあきらん
ゆかちやも後してたしきまはるにゆるる夜中の視と
娘の吹し吹しとんやとまもまらんにゆるる物をとふはるるまの
かみかみまもあはしきしきまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる
てまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる
諸なるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる
てまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる



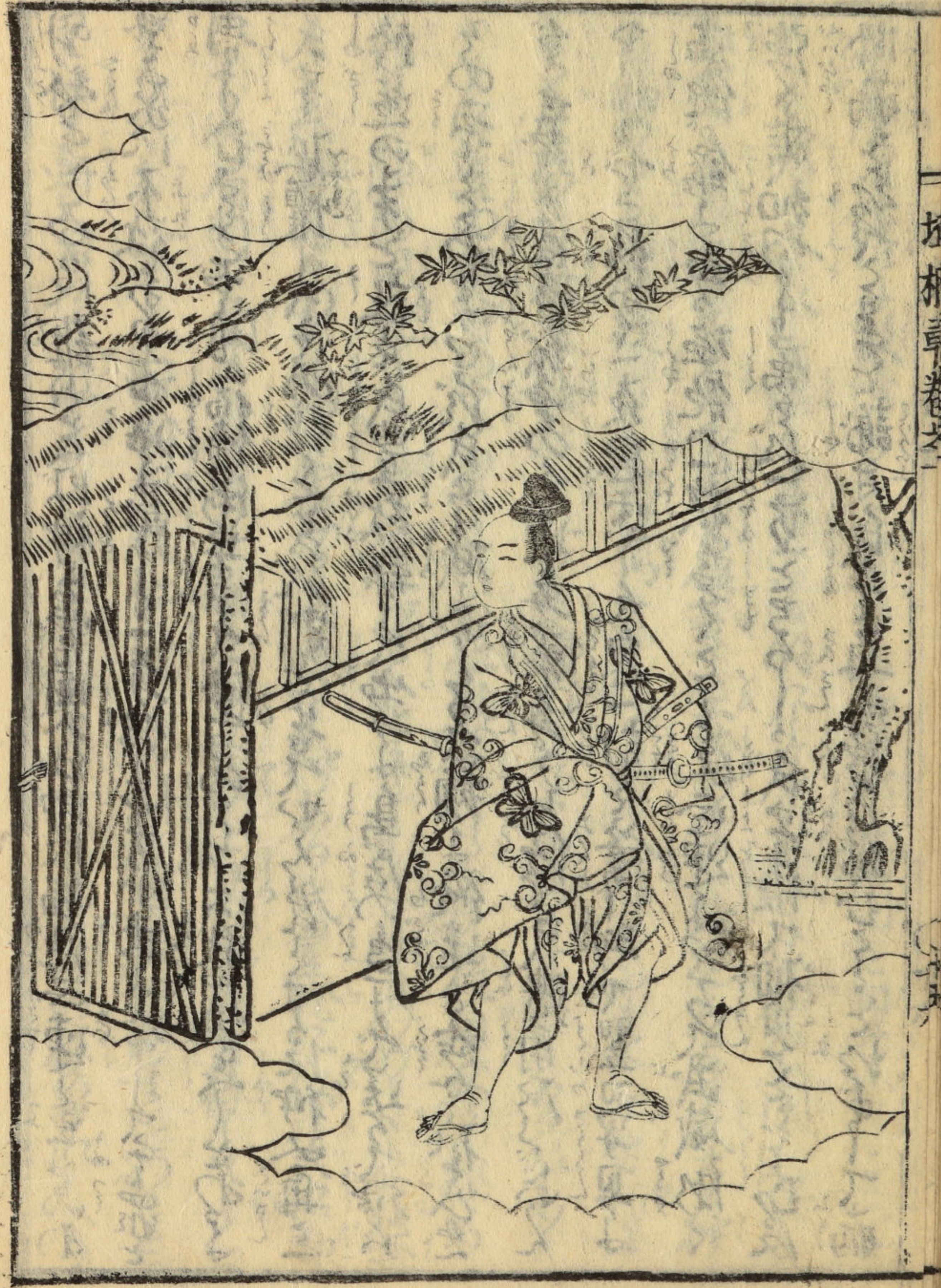
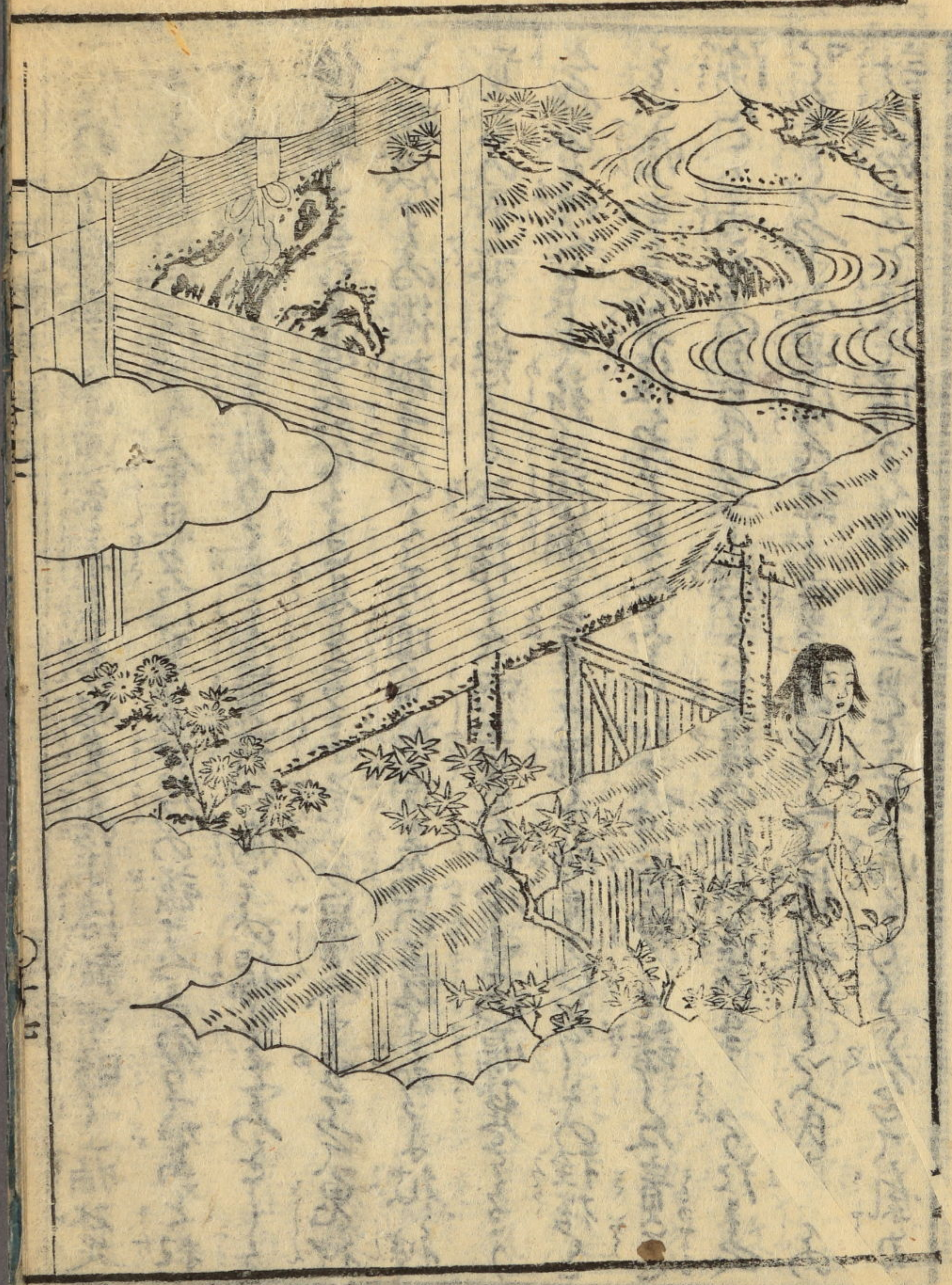
なまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる
月まらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる
あしきまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるるまらんにゆるる
さらば後のをたれ後のまはるるのなまらにづま
あしきもどはる後をのむに後をのむにのむに
若く視しをえ
さらば後のをたれ後のまはるるのなまらにづま
あしきもどはる後をのむに後をのむにのむに
若く視しをえ

かゞく甲斐一城の事ありしが民豊よつて久家川原(勢)に候り
 してゆきしにわが隣國に在りし時とゆるるる應仁の亂に細川
 氏も致功ありしかる將軍家が候て在赤しなりし文明の
 是細川又田等の群雄も各國より入つて上下暫く静かに候
 細川を送りし山邊より入りし事よ候に諸國に高知ありし
 段寄しき舊と諸國に淀川とよき頃へ神を月の二村西宮と
 流し後おある所もなる人ありて便船とて入氏豊幸と船と
 し其姓名も同く西國方のたゞく荒田行末と云武術無名と
 談ずるに其辨法もさかしくふかしく氏豊と交わり候に酒を令
 しくふきと容れ候船名もさかしく時近く居らるる家誠の
 富田の事とて下野の小神あり荒田の事とて下野の官守御門候

の事とて近き其華に雜一人他遠の者あり具上玉地車深し
 て魚故免と居とけし事なりし君明は彼地を下り多分候事
 八洞廟とておしき舊觀より後とて水又君の福徳と援助
 なる候事とて訪多し事とて神人路隔なき候後候事
 考りて居人ありし事とて云畢て忽其形を以て氏を奇
 怪とて候事とてわが一城の事とて久家と末頼も候事
 しく其事もとて聖多の志細川より候事とて讀み下りて
 軍將とて助ける事とて修りし氏を神乃詞に候事とて速く
 掌して彼地にふる事とて富田の城守りか事とて氏を
 守りし氏を神乃詞の詞の差りとて版し荒田の事とて
 なる事とて城南二里候に候事とて神祠の事とて

荒廢の跡に形をうるとなすこゝ子別家園と曰ふかこゝと
 誠より人家を離れ去り一里餘にたれ水は沿石の園に
 老樹を多く植へて食へる蘆葦生茂つて路をうらみ氏を神
 乃幼のこゝ僕後ときまひ馬をわたり只一人路をみまると合行
 るる在りて路は接たれども顔あはれども文字をさへあはれなく
 るに荒田明神のやありさへは頭をさへしと後奥をうらむ
 行はし東の風起くおはと抱忍えと毎がう暫あつて衣冠
 くく歩むわり別を多うくつり神あり氏豊比に依り祐助
 はより眉目を用さたりと謝と神又幼とをささると称え
 やうくをむこゝ二所餘りて社にいたる拜殿の基礎のこゝあはれ
 して軒くらり破きく荒廢多うくこゝ白傍の林のゆけり人乃

明神とてわに誰とては神云當國入江郷に塩飽云連と云とのあ
 りて不致あり也此は般もく二身餘りて小末も余りて
 書しむこゝやも宿債漸早う去五日のうらみ大放遣とて
 氏を恐懼しんその他とて別と告げかんはに神又再
 修造のまを託と氏豊教誨へ出り島屋のまを託と送り神の
 そのまを託とて氏を城かへり類子修造を企てねん
 ぐをねも連多張りの人近多荒多うら修造に費用は
 少くもなす極あり一夜思索しん忽一計とて妻出で翌日早見
 塩飽館のあ塩飽の族多うこゝと云連子いつち出威漸く
 強く細くも属を一方とちりて氏を推して相見とて
 外病とていふと謝り氏を再三強を境やむとて病



地机草卷之

五

本にありて對面と三連を云ふ多分は本疾は漆就中時痛楚
 堪へず身公困倦し余旦夕に世を去る君何の議すべしあつて加鳥と
 及ふと新に氏を傷りくま貴所の病との據とを云ふ
 依て耶一と進んだやまももろもも異人しあつて鬼神
 と驅役丁の術祖をいふなり頃日城南荒田の森にありて彼神
 貴人の不敬と怒りく怪怪しく呵責を加ふ余の痛楚を云ふ
 ともいふ人とし新に祖廟と云ふ罪を謝すむかひの怪怪を
 ともいふ人とし平後おしやを云ふ神點頭し諾しぬ貴意
 降んとし兩三日のりたの平願く平後の後修造の事ありたまふ
 かしと云ふ三連ゆえ諾し貴所の事し後之と云ふ氏を云ふ
 計のありと依て居るなりと云ふ目と云ふ病と云ふ余を氣力

平野のごとく三連家の子即位と集る云ふ平生神明のあか
 して鬼神とけしるまおおまを云ふ平の病荒田の神の事あり
 して一と罪と謝せんは祠廟を再建せしむる氏を云ふ教
 りやもも黙止がまは依りて荒田の神家ありの恨あり
 たりとも多分多分に充人なりなり月修造の事あり地
 ともいふ荒田の神ありま古記と云ふは往多分地より
 害ともいふ圓行ありまを云ふと教し後猶も云ふ
 其獨體ともいふ祠を建たりしより二人開廟と稱る其駈
 わりより衛宮宇莊兼よも四時の祭祀たを云ふこれ
 を圓の宗廟社稷の神にものだ詮するともいふ淫祠しん云ふ
 ぶだも理あり況や連多の兵乱よも小の神社佛周兵火に云ふ

荒廢するを數と云はれ夫より民饑く困困たるを以て
 再建と議する暇の民の愚あるは陰祠を奉りて神祇
 と信じて僧徒の漫よ功德と善を以て無益の大刹を築く
 因池と開く民力と費は幸なく廢たると人々修造
 して之を命と持信せりて情なく禍をなすも其の
 沖の民人とは後するものありて民の饑たるを以て已に
 之を建するを惜つる私怨と念ひ山皇神のを以て
 也と云て祥よ遠い陰祠と壞て年遠あり例ありて
 の故地を以て年々民の福あり除ふんわんばえ僕後
 と思ふ彼地より陰祠と壞て海に沈み片瓦ものも
 ありて其を掃拂し掃除せしむ後高田より氏を以て
 禱す

氏を以て其の平後を督り且修造のまを以て三連祠と
 と思ふ諸に氏曲豐駐く西六のころ三連祠の利害を
 しく悔りやと云く氏を以て其の初より三連祠と
 まあま今更言ふありて其の此後を以ていひて
 一月餘を經て城外に籠り日暮んかん子馬狩りて
 松子白衣より髪を以て其の分と撰りて馬を以て
 多くて其の荒田の神あり眼を以て其の罵りて云は
 ば毀滅するを以て恨めを以て報ひたりと云く其の
 其の始末を以て其の謝し神顔色を以て其の云
 感傷盛んにて其の頼りて其の承継を以て其の
 衰へ恨を報する時ありて云其の怒りの行所を以て

僕後身より其形とてと氏をこころし病とて旬餘にして
遂に死に其子孫馬大竹之門下ありて連年とて
とて入道とて守敬齋と号し餘りて死に後盛世
て世に其名をいふとてとて誠と豪傑のよ段とて

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

席上奇觀垣根草一之巻終

